



親鸞の思想と生き方

浄土真宗にとって5月は、親鸞聖人ご誕生の「降誕会」をお祝いする月です。親鸞の強烈なカリスマは、真宗門徒にとどまらず、日本人の思想、哲学にも大きな影響を与えてきました。その人気は時代を経ても変わらず、「親鸞」と見出しにあるだけでその本を手にとると言われ、新刊案内に「親鸞」という字を見ないことはありません。

* * *

親鸞聖人の凄さは、あらゆる物事を通して、その奥にある何倍もの広い世界を感じ取られ、普遍の結論を導き出されたというところです。情報が今のように簡単に得ることができなかつた時代に、あたかも宇宙の仕組み、あらゆる思想、宗教を知り理解し尽くしていたかのようであり、この世のすべてに何一つ無駄な存在はないとの広大な視野と慈悲深い謙虚さで総てを受け止めておられました。

最も大きいことは、人間があてにしているものが全部なくなっても、いちばん終わりにある絶対のものを、私たちに示して下さいました。しかもそれが、誰に対しても開かれていて、どれだけ修行したとか、どれだけ学問をしたとか、どれだけ寄進、供養を積んだとか、生まれ、

育ち、職業、等とは全く関係のない救いの世界があることを、我々衆生、凡夫の隅々にまで示して下さいました。そのことは、それまで選ばれたものだけのものだった宗教、僧侶が国の安泰を祈る国家公務員のようなものだったことからすると、一般的な親鸞のイメージである、結婚をし家庭を持ち、肉食も厭わなかったこと以上の、革命的、反逆的なことだったのです。

* * *

世の中には私たちが当てにする便利なものがたくさんありますが、それらの多くは、誰もが平等に得られるものではなく、たとえ今得ている健康や財力、親や兄弟にしても、いつまでもあるものではありません。そういうなかにあつて、親鸞聖人は自らのご生涯を通して、本当に頼りになる究極の誰もが共有できる「お念仏のみ教えに生きる」ことをお示し下さったのです。

現代社会は、人間の欲望が外へ外へと拡がって行って、気がつくとも中身が空っぽになってしまい、そのことが苦悩の原因を次々と作っています。そういうときにもう一度、自分の依って立つ基盤を見つめることは、非常に大きな意義があります。

今話題の某都知事のように、経済的な充足が、知らず知らずに人間を傲慢にできてしまっているかもしれないのです。気が

ついたときには、最初をもっていただろう高い志が失われ、誇りも失われてしまっている人間の愚かさを連日の報道で知らされています。

親鸞思想の中核をなす「悪人正機」の「正機」とは、悪人こそ「阿弥陀如来の本願の力によって救済される資質がある」という意味であり、この「悪人」とは、現代の感覚でいう悪人ではなく、煩惱を抱えた凡夫、すなわち、私たちの真の姿です。

煩惱とは、人の心を惑わせる自尊心、満たされない欲望、嫉妬、怒りなどで、私たちの苦悩は例外なくこの逃れられない煩惱ゆえなのです。だからこそ、人間としていちばん大事なものは何かということ振り返り、そのことを忘れないように日々を過ごしていくことが大切なのです。「己の醜さ」が自覚できるかどうかですが、そこにお念仏が至り届いているのです。それは、消極的な人生に暗く落ち込むのではなく、そんな私が阿弥陀如来の慈悲に包まれた温かさの中で生かされていることの気づきをもたらし、「おかげさまで」と喜んで生きることにつながります。人は「善人の閉塞感」に息詰まるとき、親鸞に惹かれるのかもしれませんが、間違わずに味わっていただきたいと願います。 合掌

奏庵法座
宗祖親鸞聖人降誕会

日時
5月26日(木)
午前11時より

「真宗宗歌」
正信偈
住職法話
ご文章拝読
「恩徳讃」
～*～
おとぎ

親鸞聖人がお生まれになったこの季節には、青苗が並ぶ水の張られた田に山々が映る日本の原風景が見られ、水の恵みの大切さが味わえます。長かった治療の成果が判る日も雨、病院に向かう横須賀線沿いの雨に洗われる新緑の清らかさが、何事も受け入れられる心にしてくれるようでした。待ちわびた声に戻り法話が長くなるかもしれませんが、どうかお聴聞下さいませよう、どうぞお参り下さい。

お礼とお詫び

先月号に載せさせていたいただきました、「第二十五代専如門主・伝灯奉告法要」、「親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年法要」に対するご本山からの宗門振興推進基金懇志のお願いに対し、早々に快くご協力をいただきました皆さまに心より御礼申し上げます。

またその際の「振込先の記載」に誤りがあり、お手数ご不安をおかけしておりますこと、申し訳なくお詫び申し上げます。

正しくは下記の記述の通りです。おついでに折にご協力いただければありがたく存じます。

ご懇志をいただきました皆さまには、領収書(5月19日現在)を同封させていただきましたが、お振込名のカタカナ表記などで不手際がありましたらお申し出いただければ幸いです。

【龍溪寺への振り込み】

- ゆうちょ銀行
- 19060-2
-3338701

*必ず「リュウケイジ」とご確認の上ご入金下さい。

昨年夏の盛りが過ぎる頃、急に声が出なくなり「坂道を転げ落ちるが如く」体調を崩した。その原因が悪性リンパ腫という癌であることがわかり、入院治療を経て通院による8クルールの抗がん剤治療の八ヶ月余、声が出ずお経もお説教もできない闘病の日々を過ごし、その治療の成果が判ったのは4月末の古稀を迎えた次の日だった。■数時間をかけての検査が終了、主治医からの診断結果を聞くまでを重苦しく待ちながら、実感としては、治療前の痛み苦しみに不安も、諦めかけていた声も気がつけば良くなってきている生身の感覚に、「いい結果なのでは…」という期待と、一方では、癌という病気に完治はない…と言いつ聞かせ、「また治療と言われれば、お任せしてやっていこうね」という家族の「思いやり予防線」が、心を行きつ戻りつした。■そして聞いた「今の所、映像では腫瘍は認められません。消えています」という言葉、ホッと「ありがとうございます」とお礼を言いながら、がん患者の通るべきプロセスのひとつとして淡々と聞いたようにも思う。それより、私の本来の声を初めて聞いた主治医の、「谷山さんはそんな声だったんですね」という言葉に、「そうですよ、いい声でしょう？」と応えた時には心からの喜びを実感した。■現代長寿社会の医療が、延命より残された人生の尊厳をいかに維持するかに重きをおかれてきていることをありがたく思う。今現在、発覚する前後には辛くて「しようとも思えなかったこと」が、「気がつけばしている、出来ている」その「今」が愛おしい毎日だ。「今」なのだから長い短いも関係ない。その「今」を共有する身近なお互いの、またそこから広がっていく世界の「今」を尊重し認め合いながら、与えられたいのちを全うすること、それが生きるという仕事…と、「今」思っている。 Norimaru

